精神神経学雑誌
第112巻第5号（2010） 464-529頁

第105回日本精神神経学会総会

シンポジウム

産業精神保健における臨床研究と企業倫理

コーディネーター　齊尾　武郎

1．手探り状態の“職場のメンタルヘルス”

この数年，職場のメンタルヘルスの重要性が認識され，種々の取り組みが行われているが，臨床現場の実感としては成果を上げているとはいい難い．その理由のひとつには，うつ病をはじめとしたホワイトカラー労働者に多い精神疾患に対する診断と治療が，適切に行われていないケースが少なくないことが挙げられる．もうひとつには，昨今の職場のメンタルヘルス“ブーム”に乗って出現したさまざまな産業精神保健関連サービスで提供されるサービスの質にかなりの問題があることである．

いっぽう，産業精神保健という学問分野独自の臨床的な問題（企業社会という環境を背景に出現する特有の精神病理）や研究方法論上の問題（疾病統計が公表されにくい）もあり，こうした職場のメンタルヘルスにまつわる医学的介入の成果について評価のしにくい状況がある．

したがって，行政や製薬会社のイニシアティヴでうつ病の早期発見のための疾病啓発キャンペーンが行われても，あるいは各企業でさまざまなメンタルヘルス不全対策がとられても，それらが果たして有効なのか，判断する材料となるデータに乏しい．むしろ，手探り（かつ不用意に）で行われているこうした対策が，不必要に精神医療サービスへの負荷をかけ，かえって事態を混乱させている観がある．すなわち，現行のメンタルヘルス不全対策がいずれもevidence-basedではないがために，職場のメンタルヘルスをめぐる社会の混乱は鎮まるところを知らない．

2．シンポジウムの概要

そこで，本シンポジウムでは，コーディネーターの筆者を含め，6名のシンポジストに職場のメンタルヘルスの向上のための長期的な戦略を立てるための基礎となる議論を行っていただいた．

当初共同司会の予定であった栗原雅直氏（日比谷滝村クリニック）が，5月に開催予定の総会が新型インフルエンザの影響で延期されたことにより，8月のこの時期での総会参加が不可能となったため，参加の代わりに会場にメッセージが寄せられた．その要点を筆者の解釈で要約すれば，職場のメンタルヘルスに関係する人・モノ・情報は錯綜しており，意見交換するための共通の基盤を作っていかなければならない，ということだろう．栗原雅直氏の代理として，共同司会は栗原千絵子氏にお願いした．

まず，最初に筆者がコーディネーターとして，

第105回日本精神神経学会総会＝会期：2009年8月21～23日，会場：神戸国際会議場・神戸商工会議所・クオリティーホテル神戸・ポートピアホテル
総会基本テーマ：わが国精神医学のめざす地平，坂の上の雲
シンポジウム　産業精神保健における臨床研究と企業倫理　座長：齊尾　武郎（フジ虎ノ門健康増進センター，K&S労働衛生コンサルティング），栗原　千絵子（放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター，医薬品開発支援機構）

シンポを企画した趣旨を説明し，続いて伊藤和久氏より企業の人事部長の立場から，櫻澤博文氏より医師・労働衛生コンサルタントの立場から，天野和江氏より産業看護師の立場から，それぞれ産業精神保健の実務面についてご講演いただいた．その後，光石忠敬氏に産業精神保健分野の研究発表に関する法的な問題をまとめていただき，栗原千絵子氏に倫理的な問題と政策提言をしていただいた上で，短時間ながら総合討論を行った．

各シンポジストの発表はそれぞれに従来巷間では語られてこなかった喫緊の課題・驚くべき事実を含み，会場の参加者に大きな示唆を与えたであろう．そうした本シンポジウムの“目玉”となったトピックについては，読者諸氏が各演者の論文をごらんになって考えていただきたい．あるいはシンポジストたちは会場では重要なトピックを述べたが，論文では“発言”を自粛してしまっているかもしれない．しかし，それこそまさに，本シンポジウムで解決しようとした臨床研究にまつわる問題と同じ構造なのである．

筆者はシンポジスト諸氏らと話し合い，今後もevidence-basedな産業精神保健の実現のための方策を考えていくつもりである．